

中等部第3回

国語

平成31年2月4日実施

50分

2019年度

〔受験上の注意〕

- 一、問題は〔一〕〔二〕があります。
 - 二、解答時間は五十分です。
 - 三、解答用紙はこの冊子の最後にあります。
キリトリ線より切りはなしてください。
 - 四、問題用紙・解答用紙の所定のところに書いて
ください。
- 四、問題用紙・解答用紙に、受験番号・氏名を
記入してください。

受験番号	氏名

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学六年生の土屋響音は、「ふるさと文化祭」で音楽やダンスを発表するため、準備をしている。姉の千弦は、幼いときからピアノがとても上手だったが、いつのころからかその音が変わっていったことに響音は気づいていた。千弦は最近、アポロ・クラシック・ピアノコンクールに出場し賞を獲得したが、その後ピアノを一切弾かなくなってしまった。そんな千弦の様子を見て、お父さんは響音と千弦をおじいちゃんの家へ連れてきた。

「おじいちゃんちでのホームステイ、とつぜんでびっくりさせたかもしれない。お父さんがかつてに決めてしまつて、悪かった。^{※とうこ}燈子も、せっかくの日曜に手伝ってくれて、ありがとな」

お父さんがしんけんな話をはじめたとわかつて、響音も千弦もきちんと^aセイザをする。おじいちゃんたちも、はじめにお父さんを見た。

①「お父さんは、家族とか、ともだちとか、そういう人間関係っていうのは、ジグソーパズルみたいだなんて思うんだ。色も形もちがうピースがあわさって、ひとつの絵をつくる。でも、じぶんの色や形しか見なくなると、少しずつ形がゆがんでいって、つなぎ目がすきまだらけになる。いまうちの家族は、つなぎ目に少しすきまができて、ぐらぐらしているパズルなんじゃないかな。だから、落ちついてピースの形を整える時間をつくらうって考えた。いままでとは、まったくちがうピースになってもいい。だけど、きつとまた、ひとつの絵をつくれるようになる。まあえよりもっとすばらしい絵だ。そのために、お父さんとお母さんも、いままでのこと、これからのことを、話していこうと思ってる」

お父さんは、おじいちゃんたちに向かって、頭を下げる。

「おやじ、おふくろ、燈子、ふたりのことをよろしくお願ひします」

千弦は少し考えたあと、おじいちゃんたちに向きなおって、「よろしくお願ひいたします」と、きちんと頭を下げた。

響音もあわててまねをする。けれど、いつも顔をあわせているおじいちゃんたちに、あらたまったあいさつをするのは、ちょっと気はずかしい。

おじいちゃんは、うむ、うむ、とうなずいた。

「子どもたちがいるところで、いないところで、親どうしもゆっくりじっくり話しあえ。子育てなんてなあ、子ども百人いりゃあ百とおおり、親が百人いりゃあ千とおおりつてもんよ。そうそううまくいったまるかい。おしあいへしあいして成長するもんだ」

「母親だ父親だっていつても、はじめての経験なもの。失敗くらいいくらでもするわよ。わたしだって、『おばあちゃん』をやるのははじめてなんだから」

② おばあちゃんの言うとおりで。お父さんが「お父さん」をやるのも、お母さんが「お母さん」をやるのも、生まれてはじめてのことだ。まちがえることだって、たくさんある。

響音だって、「お父さんとお母さんの娘」や「千弦の妹」をはじめやっていると。千弦のようすがおかしいと気づいたとき、さけたりせずに、もっと話せばよかったし、言わないでと言われても、お父さんとお母さんに相談すればよかった。

いまからでも、きつとだいじょうぶ。きちんと話しあえば、よくなっていける。

「家族はジグソーパズルか。兄さん、なかなかおもしろいこと言うじゃない」

ふふん、と、燈子があごを上げる。

「おまえの影響で、千弦と響音のピースがとんでもない形になったら困るなあ」

「とんでもないとは失礼な。そうならなかったで、斬新な絵ができるでしょ」

あははは、とみんなが笑った。

二階の部屋に戻ると、千弦が軽い息をはいた。

「きのう、お父さんが『おじいちゃんの家』にホームステイするか』って言ったとき、なんか、ほっとした。ああ、お父さんは、わたしのこと気にしてたんだなあ。お父さんは響音ばかりだと思ってたから。きつと響音は逆だったね。お母さんはわたしにつきつきり、ほったらかしにされてるって思ってたよ」

響音は、上目づかいで千弦を見る。そんなことないよ、とは言えなかった。

「おじいちゃんちに来られてよかった。お母さんと、気まずかったし。放課後もともだちはみんな部活か塾で、話し相手もないし。ここなら、響音もいるし」

千弦はにっこりと笑って、響音のほつぺたを指でつついた。

このおじいちゃんちステイは、お父さんが言ったように、じぶんとまわりとを見つめなおしていくためのものだ。ピースの形を整えて、またひとつの絵をつくれるように。

それと関係するかわからないけれど、響音はふるさと文化祭の舞台にいっしょうけんめい打ちこもう、と思った。

千弦もこの家でゆっくりすごしていれば、いきいきとした音でピアノを弾く千弦に戻るだろうか……。

おじいちゃんの家に来てから二、三日は、緊張もあったのか、千弦の態度は少々こちなかつた。けれど、放課後まっすぐに帰ってきて、おばあちゃんと台所に立ったり、部屋で本を読んだりしてすごすうちに、ぎこちな

さは消えて表情も明るくなっていった。

ただ、響音と燈子がふるさと文化祭の練習をしても、けっして関わりとうはしない。響音は、ほんとうは千弦に歌やダンスの相談をしたかったけれど、できなかった。

つぎの打ちあわせの日がやってきた。

『春をさがす旅路』アンデルセン「雪の女王」によせて』の、演奏する曲と順番を、台本のように見やすくまとめたプリントが配られた。この二週間で、先生がつくったものだ。

「先生も、やるときはやるのよ」

曲も長さを調整して、短くした歌は、うたう部分の歌詞が書いてある。美枝はプリントを見て首をかしげた。

「秋君たちがつくってきた伴奏って、楽譜はつくらないんですか。歌詞だけで弾けちゃうものなんですか？」

「じぶんでつくった伴奏だからね。楽譜に落とすほうがめんどくさいっていうか」

「そうなんだあ……。ピアノ弾ける人の頭のなかって、ますますふしぎ」

じぶんでつくったダンスは、ふりつけ表がなくても踊れるでしょ、という秋生に、美枝は「あ、そっか」と納得した。

とりあえず歌の雰囲気をつかんでみよう、先生の台本に書かれているとおりにうたってみた。途中とちゅうでひっかかりながらも、秋生も燈子も、歌詞にあわせた伴奏を即興で弾く。美枝は感心しきりだった。

今後は、ピアノ担当のふたりはできるだけはやく曲を仕上げて、練習用に演奏を録音する。歌手兼ダンサーの響音と美枝は、その録音をもとに練習をつづける。そして一か月まえから通し練習でみがきをかけていく、ということになった。

「もちろん、メンバーどうして話しあっていっしょに練習したり、おなじ時間にレッスンをあわせたりしてもらってかまわないわよ」

しばらくは個別練習になりそう、と残念そうな顔をしていた美枝の目がかがやいた。

それでは解散、と先生が言いかけたとき、燈子が手をあげた。

「あの、ちょっといいでしょうか。響音ちゃんのお姉ちゃんのことなんですが……」

燈子は、ピアノを弾かなくなった千弦のことを話す。小宮山先生や舞台のなかまにもきいてもらったほうがいいと考えて、打ちあわせの場で話すことにしたのだった。

秋生は「そうだったんだ」と、しずんだ顔をした。

「最近の学校行事もそうだけど、アポロでも土屋さんのピアノはぜんぜん楽しそうじゃなくて。表彰式のあとで、

審査員長から『きみの曲は、アレグロ・コン・ブリオだよ。意味はわかって弾いてるかい』って言われてさ。

④ 顔が青かったんだよ……」

「うわ、それけっこうきついかも」

燈子は顔をひきつらせる。響音と美枝に、小宮山先生が説明してくれた。

「おもに楽譜の最初に、『この曲は、このくらいのはやさで、こういう雰囲気で弾きなさい』って指示が書いてあるの。たとえば、アンダンテなら歩くくらいのはやさで。アダージョ・カンタービレなら、ゆったりと、うたうように。土屋さんが弾いた曲は……」

『木枯らし』と、『ワルトシュタイン』第一楽章でした」

「あら、二曲とも『アレグロ・コン・ブリオ』ね。アレグロは、快活なはやさで。コン・ブリオは、いきいきと。あわせると、『曲に命を吹きこみなさい』って感じかな。千弦さんは『どんな曲か理解せずに、ただ弾いてるんじゃないや』

ないの』って言われたようなものなのよ。ピアニストをめざしているような子にはショックよ」

先生は、心配顔になった。

「数年まえから、コンクールで燈子ちゃんとおなじ苗字の子がいるな、とは思ってたの。響音ちゃんのお姉さんだったのね。ギジュツも同年代では頭ひとつ出てたし、音がよくて、インシヨウに残る子だった。最近では表現のびやかなる感じがしていたけど」

このままになつてしまつてはもつたいたない、と先生はつぶやいた。

「あの、秋君は、ふるさと文化祭の練習をつづけていつて、だいじょうぶなの？ ピアニスト、めざしてるんでしょ。音楽受験するつてうわさがあるつて」

響音はおそるおそるきいた。ほんとうは、秋生もふるさと文化祭の出しものに時間をとられている場合ではないのかもしれない。全国クラスの大きなコンクールもあるはず。毎年、この時期になるとお母さんも千弦もピリピリしていた。

「それ、よく言われるんだよね。でもぼくは、高校は普通科に行くつもりだよ。がちがちの音楽勉強はちよつと……。いちおうふつうの受験勉強があるから、今年のコンクールはパスするつもりだったんだ。だけど、アポ口はおもしろそうだったし、ふるさと文化祭も楽しそうだったからさ。音楽受験するしたら大学に入るときかな」やっぱり、秋生は燈子ににている。音楽を楽しくもうという気持ちが強くて、マイペース。

音楽受験をするとなれば、きれいな曲があつても山ほど練習しなければいけないし、弾くだけでなく、ほかの勉強もたくさんある。先生もうなずいた。

「本格的な勉強は、音大からでもけつしておそくはないからね。もちろん、高校からピアノ科を受験するのもいいけれど、どちらかというとお親御さんのほうが熱心になつてることがよくあるのよ。小中学校のうちからスパルタされすぎて音楽がきれいになつちゃうつて子、たくさんいるから。先生は秋君みたいな、ほどほどタイプでもいいと思つてるの」

千弦も「スパルタされすぎちゃつた子」なのだろうか。

お母さんは、千弦のピアノにとても熱心だった。「お母さん、音楽の道に進むことが夢だったから」とか、「千弦は、ほんとうに才能があるわ」という言葉が、千弦に降りつもつていつたのかもしれない。

響音も小さいころは、お母さんから「ピアノ、練習しなさい」と言われていた。でも、響音はうたつたり踊つたりするほうが好きで、まじめに鍵盤に向かわなかつた。ついには「お姉ちゃんのじゃまをしないの」としかられてちぢこまり、気づけば、お母さんは千弦のレッスンやコンクールにつきつきりになつていた。

ピアノという意味の名前の千弦、音を響かせるという意味の名前の響音。

お母さん、子どもには音楽に関係する人になつてほしくて、でも響音はあんまりピアノをやらなかつたから、千弦ちゃんにいつしうけんめいになりすぎちゃつたんだ。音楽の楽しいところが見えなくなるくらい、いつしうけんめいになつちやつて、千弦ちゃんも、音楽の楽しいところがわからなくなつちやつたのかな。

千弦の音からかがやきが消えていつた理由が、響音のなかにストンと落ちてきた。

千弦ちゃんが、また音楽を楽しいつて思えるようになれば、きらきらした音が戻つてくるつてことだよね。

燈子のピアノがあたたかい雪を降らせたように、秋生の伴奏が金色のうずをまきおこしたように。みんなでつくる舞台にも、美しい冬と春の情景をつくりだしたい。

コン・ブリオ。

⑤ 千弦の心に、いきいきとした、きらめく音の粒を、届けたい。
そして、お母さんの、心にも。

(小俣麦穂『ピアノをきかせて』講談社)

※燈子……お父さんの妹。
※打ちあわせ……ふるさと文化祭での発表のための打ちあわせ。出演者は響音、美枝、秋生、燈子の四名。
※先生……ピアノを指導してくれる小宮山先生。
※学校行事……入学式などで、秋生と千弦はピアノの伴奏をすることがたびたびあった。
※アポロ……アポロ・クラシック・ピアノコンクールのこと。このコンクールに秋生も出場し、賞を獲得した。
※『木枯らし』……フレデリック・ショパン作曲のピアノ曲。
※『ワルトシュタイン』……ベートーヴェン作曲のピアノ曲。

問一 線部(a) (c) のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 線部①「お父さんは、家族とか、ともだちとか、そういう人間関係ってというのは、ジグソーパズルみたいだなんて思うんだ。」について、次のⅠ・Ⅱの各問いに答えなさい。

Ⅰ お父さんは、「人間関係」と「ジグソーパズル」のどのような点が共通していると言っていますか。三十字以内で説明しなさい。

Ⅱ お父さんは、このたとえを使って何を伝えようとしていますか、説明しなさい。

問三 線部②「おばあちゃんの言うとおりだ。」とありますが、おばあちゃんの言葉によって響音はどのようなことを考えましたか、説明しなさい。

問四 線部③「秋生も燈子も、歌詞にあわせた伴奏を即興で弾く。」とありますが、二人に共通する、音楽に対する姿勢をふくむ一文を、本文中から抜き出し、初めの五字で答えなさい。

問五 線部④「顔が青かったんだよ……」とありますが、その理由としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 千弦の力量では、「アレグロ・コン・ブリオ」の曲を弾きこなすのは難しいことであり、自覚はしていたものの、審査員長から指導をされたことに対して、落ち込んだから。

イ 千弦の演奏した曲はいきいきと、快活なはやさで弾くことで、曲に命を与えることができるが、千弦の現在の力量ではその指示に應えることができず、くやしき思ったから。

ウ 審査員長から、千弦の演奏は「アレグロ・コン・ブリオ」の内容や、曲の本質をとらえているようには思えないということ指摘されたことで、強い衝撃を受けたから。

エ 以前から自分の演奏が「アレグロ・コン・ブリオ」ではないと分かっていたものの、コンクールで演奏し、表彰された達成感が打ちくだかれ、怒りを感じたから。

オ 表彰され、力量を認められたのに、曲の意味を理解せずに弾いているのではないかと指摘され、自分の演奏に自信を失い、どうしていいかわからなくなったから。

問六 線部⑤「千弦の心に、いきいきとした、きらめく音の粒を、届けたい。そして、お母さんの、心にも。」とありますが、ここに込められた響音の心情を説明しなさい。

〔二〕 次の文章は、水の中ですむために、クジラやイルカがどのように体や生活の方法を変えてきたかを説明した文章の続きです。よく読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、小見出しは省略しています。

現在のクジラやイルカの姿を思いうかべてみると、多くの陸上動物とちがって凹凸のすくない、なめらかな流線形の体をつくりあげてきたことがわかる。それは、先にも書いたとおり、泳ぐときの水の抵抗を最小限にするためのものであったけれど、もうひとつ大きな意味をもっている。

哺乳類にとつて、体温を一定に保つことはきわめて重要な問題である。体がエネルギーを燃やしてつくりだす熱より、外界に奪われる熱が多くなれば、生きていくことはできない。①

このことは、哺乳類が海に入ったとき、それまで以上に大きな問題になったはずだ。ほくたち自身の体験からわかるように、水のなかではいっそう急速に熱が奪われていく。クジラやイルカたちの祖先は、この問題もまた解決しなければならなかった。

まず、彼らは皮下に厚い脂肪の層をたくわえるようになった。この脂肪の層が断熱材になって、体熱が水のかへ逃げるのを防ぐのである。A 北極圏の海にすむホッキョククジラでは、体を包む脂肪は厚さ五十センチ（ほかの大形のクジラでは十数センチ）にもなる。②

そしてもうひとつ、外界に奪われる熱をできるだけ小さくする方法が、体の表面積を小さくすることだった。なぜなら、体温は体をとりにくく大気や水に接する体表面を通して奪われていくからだ。③

同じような大きさのものであっても、凹凸がすくないほど体表面積が小さくなる。つまり、クジラやイルカのなかまのどつぱりのすくない流線形の体形は、冷たい海のなかで体温を保つうえでも大きな意味をもっているのである。④

いま似た形で、大きさのちがう二つの物体——たとえば、一辺が一センチの立方体と、一辺が十センチの立方体——を考えてみる。小さいほうの体積は一立方センチ、表面積は六平方センチ、大きいほうの体積は千立方センチ、表面積は六百平方センチ。つまり、
I
がわかる。

このことを体温を一定に保たなければならない哺乳類にあてはめると、どうなるか。それは、大きい動物ほど体がつくり出す熱にくらべて、外界へ失われる熱がすくなくてすむことを意味する。体温保持という点からは、大きい動物ほど有利になる。⑤

ちなみに陸上哺乳類でもっとも小さい動物のひとつにコビトマウスがいるが、これは体長五〜六センチ、体重六〜七グラム程度。海にすむクジラ目・海牛目ではネズミイルカ類や、この本でも登場するセツパリイルカが最小だが、それでも体長一・三〜一・五メートル、体重三十〜四十キログラムはある。クジラ・イルカのなかまがある程度の大きさを保っていることもまた、冷たい海中での生活への適応だといっている。

こうして、さまざまな方法でクジラやイルカの祖先は、海中での生活にむけて自分たちの体をつくり変えてきた。その結果は、もちろんいまほくたちが目にするのとおりだ。しかし、それだけでなく生活の方法もまた、陸上動物とはおのずからコトなるものになったはずだ。

生活の方法は、なにより動物が自分をとりにくく環境をどう認知するかにかかっている。自分のまわりの状況をとらえ、餌や敵の存在を知る——その方法こそが、動物の基本となる暮らしづくりをつくりあげているといっている。先にも書いたとおり、陸上哺乳類の多くは、大気中をただようさまざまな匂いを感じとる嗅覚にたよっている。

さらに、ヒトをはじめとするサルのみならず、視覚がさらに重要な感覚になった。ほくたちは自身、どれだけ目からの情報にたよって暮らしているかはいうまでもない。

〔B〕、海の中では匂いの感覚は役に立たない。空気中にくらべてはるかに透明度の悪い水中では、視覚もかなりの制約を受けるだろう。

何キロも先が見渡せる陸上とちがって、海の中かではどんなに澄んだ場所であっても、数十メートル先がころうじてみえるくらいだ。とりわけにがりがひどい河川——場所によっては数十センチ先もみえない——にすむカワイルカ類では目は極度に退化した。なかでもインドのガンジス川にすむガンジスカワイルカや、インドス川にすむインドスカワイルカではほとんど盲目に近い。

〔C〕、クジラやイルカのなかまは、どんな感覚をつかって自分のまわりの状況をとらえるのだろうか。もちろんきわめて近い距離では、視覚はたしか手段になる。しかし、水中でとりわけ大きな役割をはたすのは聴覚だろう。

音は、水中では空気中にくらべて五倍も速く伝わっていく。ほくたちは水中マイクをつかって、さまざまな海で海中の音を録音してきたけれど、ときにははるかかなたで波がくだける音や動物たちの声を聞きとることができるときに驚いた。

音にみちた世界で、クジラやイルカのなかまはすぐれた聴力を身につけた。もしもイルカをまじかに目にする機会があったなら、目の後方に小さな穴が左右ひとつずつあることがわかる。それが耳だ。〔D〕彼らは、海中にひびく波の音、餌の小魚のムレが放つ音、船のエンジンの音などを、ほかのどの動物よりも繊細に聞きわけながら、自分のまわりの世界を描きだしているのだろう。

(水口博也『イルカと海の旅』講談社)

問一 線部(a)(b)のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 〔A〕〔D〕に入れるのにもっとも適切な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア もし イ しかし ウ おそらく エ では オ しかも カ たとえば

問三 〔I〕にはどのような文が入るのが適切ですか、考えて答えなさい。

問四 以下の文は、本文のどこに入るのがもっとも適切ですか。〔1〕〔5〕の中から選んで答えなさい。

それは、ほくたちが冷たい海に入るときに、ウエットスーツやドライスーツを身につけるようなものだ。

問五 〔 〕でかこまれた段落は何を伝えるための段落ですか。もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 陸上動物と水中動物では、体の大きさがかなりちがいで、体の大きい水中動物の方が有利であることを伝えている。

イ 陸上に比べて水中の方が体を大きくして冷たい海中での生活に適応しなくてはいけないことを伝えている。

ウ 陸上では乾燥する暑い夏に対応し、水中では体温を奪う冷たい水に対応しなくてはならないことを伝えている。

エ 水中にすむクジラ・イルカのなかまは、ある程度の大きさを保って水中で暮らしていることを伝えている。

オ 水中にすむ動物の方が、陸上にすむ動物よりも長く生きられるように様々な工夫をしていることを伝えている。

問六 ——線部①「動物が自分をとりまく環境をどう認知するか」とありますが、この例として不適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア キリンがその背の高さをいかして、遠くから近づく敵をすばやく見つける。

イ イヌは鼻のよさをいかして、えさの中にまじっている毒物を見分けることができる。

ウ サケは生まれた場所からどんなに離れていても、その記憶通りに川をさかのぼり産卵をする。

エ チンパンジーはえさをくれる人をおぼえていて、その人が来たらえさをねだる。

オ クジラは何種類かの音を出して、なかまと連絡をとり、えさの小魚を捕獲する。

問七 ——線部②「かろうじて」とありますが、この言葉をひらがな三字で言いかえなさい。

問八 この文章のように、私たち人間も、環境の変化にもなつて自分たちの生活の方法やスタイルを変える必要があります。最近、プラスチックストローのかわりに紙のストローを使う店がでてきました。この紙のストローの使用について、あなたの考えとその理由を書きなさい。

